

心にかこむ拳式

私は数年前から拳式用の祝辞のプランを練ったり式進行用の台本を用意したりすることを止めました。

それはシビルウエディング・ミニスターとして司式を

司ったある拳式から、次のようなことを学んだからです。

打ち合わせから得た2人の考え方や希望を取り入れ、私は時間をかけ祝辞の原稿を用意して当日を迎えました。ところが打ち合わせをしたときとこの日とは、2人の表情がまるで正反対なのです。用意した祝辞は、「夢と希望に溢れ将来の幸福を約束される2人に、このような良き日を迎えることができよかったですね」と、2人が何の不安もなくこれからの人生を歩む

ことを祝福する内容でした。目でたい日ですからこういう内容の祝辞は、前にも何度かつかったことがあります。また、打ち合わせで会ったときの2人の印象と和気藹々と楽しいひとときを過ごしたことが、私をしてそのような祝辞を用意させる動機になったのです。

拳式を司るミニスターの祝辞に美辞麗句は不要!! 自然体であるべし

拳式が開始される前、最後の打ち合わせのため控え室を訪ねた私は、緊張と不安におののく2人の様子に頭を抱えました。

新婦は今にも泣き出しそうな表情で、新郎は心ここにあらずといったあんばいなのです。

2人に何があったかのかわかりません。また問いかけることもできません。下手に問いかけて收拾がつかない事態になることを恐れた私は、無策のまま控え室を出て式場へ向かいました。

入場しても2人の表情に明るさはありません。式は進行して、私が祝辞を述べるときを迎えました。私は、急遽、用意した祝辞を取り止め、

「エーイ、ままよ」とばかりに、2人の目を交互に見つめながら、「人生、日照りの日ばかりではありません。土砂降りの日もあります。不安もいっぱいあります。しかし、そのようなことに怯えていたら何もできません。2人が互いに与えてやまない愛を持ち続ければ、喜びは倍になります。

結婚式は、百組あれば百通りの式があり、そのひとつひとつに“個性”がある。その個性を十分に理解し、それを前面に打ち立てた祝辞を用意することがミニスターの役目であると知った私は、それからはカタ・ヒジの力を抜いて祝辞を述べるようになりました。このことを気付かせてくれた2人に、私は心から感謝をし、折々に「元気になっているかな」と懐かしく思い出しています。

す。そして、悲しみや苦しみや不安は、2人が分かち合うことで半分になります……さあ、勇気を持って前へ進みましょう」というようなことを述べました。

拳式は無事終了。挨拶のため控え室に行くと、2人は私に笑顔で握手を求め、何度も何度もお礼の言葉を述べてくれました。それを受けながら私は、2人はただ単に緊張していただけなのかもしれないと思いました。

同時に、拳式を司るミニスターの祝辞は、美辞麗句を並べることよりも、ミニスター自身が歩んできた人生や体験を率直に語りかけることに意味があることを知ったのです。



シビルウエディング・ミニスター
千葉 淳氏

(ちば じゅん 1959年 東京生まれ。03年シビルウエディング・ミニスター資格取得。浜松市を中心にこれまでシビルによる拳式を50回ほど司る)

